

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	日本・外国昨年度六大名畫概評
Author(s)	畑山, 明美
Citation	龍南, 240: 28-39
Issue date	1938-03-04
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7465
Right	

日本・外國昨年度六大名畫概評

文 三 甲 三 畑 山 明 美

日 本 映 畫

一、蒼 氓

芥川賞をもらつた石川達三の小説『蒼氓』を熊谷久虎が映畫化したものである。映畫として先づ取り上ぐべきことは、徹底したレアリズムに終始してゐることであり、そして次には社會的展望の下に集團を描いてゐる點である。之は勿論原作についても當然云はるべき事柄である。こいふのは、熊谷は僅かの部分々々を除いては大体原作を忠實に踏襲してゐるからである。社會的展望の下に集團を描いたこいふこと、それは正しくこの映畫の大きな特色であり、過去にかうした作品がなかつた點から考へても、大に問題視さるべきものである。熊谷は移民こいふ集團の内部につき入つて、極めて客觀的に而も具體的にその表現せんとした所のものを示さねばならなかつた。さうした形成には非常な危険性が伴ふ。つまり單なる個々の分析に終つて了つて、藝術品としての統一が失はれ勝ちになるこいふことである。所が熊谷は正しくこの危険を克服し得た。彼は集團

の中に先づ東北地方の農民を點出せしめ、かゝる農民を描くことに於て彼は最もよく成功してゐると思はれる。そしてあの朴訥な方言こそは奥羽農民の集團氣を、あのつた返しの集團の中にはつきりこ浮き出させてゐるものだ。其他、下流階級の種々相が夫々の姿に於てこの映畫の中に描き出されてゐる。だが夫等は各自々々の姿をこつてゐるにも拘らず、移民こいふ一の集團氣の中に流し込まれてゐる。そこに私はこの映畫の成功を見出し得るのだ。併しその集團氣は何と暗いものであらう。絶望的なものがごこにもこ、にも漲つてゐる様な感じがする。彼等農民は日本で食ひ詰めたが故にのみ、何等はつきりしたあてごもなく出向いて行くのだ。だが熊谷はあの様に、個々人夫々の何かしら不吉な又は悲慘な事件を描くことによつてしか、移民こいふもの、それ自身悲慘な正体を暴き得なかつたのか。移民をする人達の心には、今迄の思はしくない生活を打破して、廣大な天地に新しい生活を打ち立てるこいふことで假令あの様な農民の心の内にでも何かしら若々しさや生氣や希望が動いてゐるものではなからうか。假令すべての個

々人ではなくとも、少くともさう云つた氣分が移民團の收容所には漂つてゐるものではなからうか。然るに、この收容所には部分的に仄かな生氣が見られるものの全体的には終始だれきつた絶望的な暗い氣分が溢れてゐる様に感ぜられた。私は『暗い感じ』が悪いといつてゐるのではない。自己の希望に満ちた氣持で、それに相反する客觀的な暗い事實を對立させ、そして事實に氣持が次第々々に打ち負かされてゆく有様を流動的に且つ全体に亘つて描き出してくれたとすれば、この映畫は更に深刻味を持つた而も流動的なよき作品となつただらうと思ふ。かゝる手法はこの映畫にも一部分には見出される。それは、例へばかの姉を伴つてゆく若い男（伊澤一郎扮）に於てである。だが全体としてやはり、始めから終りまで同じ様な單調な暗い感じを受けるのである。何れにしても集團を描いた映畫を批評することは特にむづかしい。まして、それが現代的な社會性（このものは、最初のシーン、號外で鼻をかませる所に先づその意義を持つてゐる）を背景としてゐる場合には一層さう言ひ得る。

大体今まで集團について述べて來たが、今更改めて言ふまでもなく、この作を一貫して流れるレアリズムが、いさゝかの破綻も見せてゐない點は素晴らしい。唯、女（黒田記代）が洗濯し乍ら子供に話してきかせる夢語りだけはさうも

氣になる。脚本の倉田文人にはかゝる甘さはなかつたのだが、熊谷がこれを敢て挿入した所に彼の甘さがある。一体何が彼女にあんな惚氣話をさせたのか？ 女といふものは石鹼の泡でも見たら胸がわくわくしてくるものなのかしら？ 所で場面として特に印象に残るのは、最初（自動車及び號外のシーン）及び最後のワンカット、それから山本禮三郎の扮した男が警官に捕まつてひかれてゆくワンカットであるが、この他、第六日目の晩の各種の歌き踊りが最後に『こゝは御國の何百里』に統一されてゆく所の演出等、見事なものである。

俳優の演技としては、皆夫々よいが、特に島耕二、山本禮三郎が秀れてゐた。最後に熊谷監督の原作に對するすばらしい理解力に敬意を表する。この映畫は恐らく昨年度の第一位に推されること、ならう。

二、裸の町

これは現代邦畫界の第一人者内田吐夢の手になつたものである。蒼氓を貫き通したものは悲慘な痛ましい現實であつた。この作を一貫してゐるものもやはり同じ痛ましい現實であるとは云へ、それは悲慘なといふよりはむしろ醜惡なる現實の力である。云はゞ音楽商福富（島耕二扮）の悲慘な運命よりはむしろ高利貸といふ醜惡なる現實的存在の力

が實に大きな迫力を以て吾々を現實世界の深みへ引きづり込んでゆく。元より吾々はこの兩者の結合した描寫の中にこそ、一層この迫力を感じるものではあるが。

擬て、この映畫には痛ましい現實をかけ離れた藝術の世界に生き込まする一人の男がある。彼は恐るべき現實の眞の姿には全然無知である。このお坊ちゃんを恐るべき現實が何の容赦もなく引きずり廻すのだ。ロマンティックな夢を抱く世間知らずの男は、現實にあやつられ動く單なる傀儡にすぎぬ。終りの方の場面の、夫と妻との海岸に於ける交渉と猫のこゝ、及び飲食店に於けるシーン、並にその間に於ける妻の心理狀態は、この映畫全体を通じての最も美しい場面である。こゝを除いては醜惡な現實がぐいぐい吾々をひきずるのだ。この映畫で醜惡なる現實の体现者として惡役を演ずる高利貸増山の小杉勇は實に天晴れの名演技を示してゐる。所で、この映畫では一番最後に於て、醜いが吾々は、最後のあの晴れやかなレコード小賣商人福富の描寫から、續いてカメラがグーツミ移行して、最初の悲慘な小賣商人達のシーンと同じく、こゝでも居並ぶ小賣商店のシーンが寫し出されてゐることに注意せねばならぬ。そこには福富の又もや辿るべき運命が暗示されてはゐないだらうか。そして、個々人の意志には無頓着な現實の必然

性が暗示されてはゐないだらうか。

尙、一言附加すれば、原作者眞船豊は現代インテリの没落を主眼としてゐたのに對し、内田吐夢は高利貸の方面にのみ力をそ、いだ關係上、男性的な迫力はあるが、一方的に偏しすぎた嫌ひがあり、荒々しいさ、か粗朴なものになつてゐる。そして福富の生活方面の描寫は不充分曖昧に終つてゐる。

併し最初のカメラを据つばなしにした、香具師（見明凡太郎扮）長廣舌のシーンは特筆されて然るべきだ。この様な場面は實に内田吐夢特有のものであり、『限りなき前進』に於てもあらはれてくるものである。何れにせよ、私はこの作を昨年度の邦畫第二位に推したい。

三、限りなき前進

この映畫の原名は『愉しき哉保吉君』といふ。私はこの原名の方が『限りなき前進』といふ題名よりは好ましい様に思ふ。脚色者八木保太郎はラストシーン、父親を連れ戻る道中で、北君（江川宇禮雄）と敏子（霧夕起子）とに次の様に云はせてゐる。『狂人になつた父は結局幸福だ。だが父は父として、我々は我々の目標をもつて進んでゆかう。』云々。こゝにこそ『限りなき前進』の意義がある。然るに内田吐夢は北君を充分に描かず而もこのシーンを省くこと

によつて、この題名を宙に迷はせて了つたのである。題名の考證は何れにしても、吐夢は原作者（小津安二郎）と脚色者の中間をさまよふことによつて、兩者の意圖の明るさを踏襲せずして、この映畫を暗いものにしなしてゐる。こゝには會社員保吉君の、永久に會社の下つみたるべく約束された運命と、最後に發狂するに至る悲惨な末路とが描かれてゐる。その悲惨な運命は我々青年すらをも抗し難い切實さを以て壓倒する。そして内田吐夢特有のあの男性的な力強さが『裸の町』に於ける程にはないがそれでもやはり感じられる。そしてそれと同時に、前作に於ける様な荒けつりの所は少くなつて幾分技巧的に緻密になつてゐる様に思ふ。併し、この言葉に矛盾する様だが私はこの映畫にしつかりとした統一がされてゐない様に思つた。つまりカット、カットがばらばらである様に感じられたのである。特にあの夢の場面を他の場面との區別もなくはつきり挿入してあつたことに於てである。而して、私には何故だかあの北君と敏子と保吉君とは夫々別々のものである様な氣がしてならない。併しそれは私が北君なる存在に氣を惹かれすぎた故かも知れない。明かに吐夢は保吉君を主に描いた。そして北君の正体には僅かししか手を觸れてゐないのである。私はこの點に不満である。私は北君の人生觀をもつて明らかに示すことによつて、この映畫により以上の精神

的要素と思想性を挿入したかつた。思想性に乏しいのは日本藝術の共通缺陷とは云ひ條、やはりひどく不満を感じる。出来ることなら、北君をもつて活躍させることによつて、一方ではこの映畫の暗さを救ひ、そして他方、北君と保吉君によつて体现さるべき思想的相剋・矛盾と云ふべきものを内に胎んだ統一をこの映畫に持たせたかつた。併し要するにこの映畫は一方的な暗いものとになり終つた。殊に、ラストシーンに於て、橋上を歩く三人の姿からカメラをぐーつと引き離すことによつて、極めて印象的に且つ効果的にこの三人の暗い將來を暗示してゐる様に思ふ。そして我々の心は暗い思ひに満たされる。その結果、始めの方に於て吐夢はユーモラスな場面を多々取り入れて明るくしなさうとしてゐる様に見えるにも拘らず、さうであればある程益々この映畫から吾々は暗い感じを受け取るのだ。だがこの暗さにいさゝか深刻味が足りない様に思ふのは残念である。

さうも不服ばかり並べたてたが、夢から醒める時の保吉君の笑ひや、狂人になる瞬間や前々からかくなることを暗示してゐた演出技巧や、専務の演説の時の態度等には印象的な感銘を受けた。主演者小杉勇（保吉君）の演技はこゝでもやはり堂々たるものであり、轟夕起子も相當なものだ。彼女は、女優ではあるが、餘り自分なりの演技を示

しすぎる様に思ふ。次に、この作品に於ける江川宇禮雄、それから子供達には感心しない。

いろいろ不満もあつたが、やはり昨年度優秀映畫として第三位に推さうと思ふ。

外國映畫

一、女だけの都

原作、脚色シャルル、スパーク、監督ジャック、フェエデの合作になつたこのフランス映畫は、斷然傑出した昨年度優秀映畫のナムバーワンと目される。かくばかり素晴らしい藝術映畫を創り得る監督は、恐らく世界に於てクレールミフェエデを除いて他にあるまい。このフランスの兩巨匠はデュヴィヴィエとは異り、極めて知的な個性味をもつた演出者である。だがクレールにあつては畫面々々是小川が流れるが如く淡白で動的な感じを受ける。それは丁度、創造的に上へくこのびあがりその青々新鮮な想像の觸手を蒼穹に向つて一杯にのびひろげる椰子の木立に似てゐる。だがフェエデは、殊にこの作品にあつては、周圍の酒に興じた花見客をよそに、満々水を湛え色あざやかに櫻花を映じた閑寂な湖水を悠々遊弋する鯉のやうである。波騒ぐ人間心理の奥底を心憎い程寂に鋭く泳ぐ、この映畫

は、かゝるフェエデに於て、最も充實されたものだ、それは動的靜の境地を描く。而もこれは實に一幅の繪であり、美術品である。濃厚で華美な、だがじつくりと内面に堀り下げた諷刺畫である。かゝる集團を取り扱つた諷刺映畫は、殊にそれが喜劇の形式に蔽はれてゐる關係上、容易には理解し難い。而もこの映畫では色々のものが渾然としてゐるのだから、寔に手がつけにくい。だが私も及ばず乍ら出来るだけのこゝをやつてみよう。

この映畫の最初のシーンは十七世紀フランドル地方の麗かな夢見る様な景色である。フランスのこの地方は、當時にあつてはスペインのフイリツプⅢの支配下にあつた。抑々フェエデがこのストーリーはフランマン派の畫から思ひ付いたものだといつてゐる通り、全くこの映畫は最初からして驚くばかりに美しいのぞかな景色を寫し出して觀客をすつかり十七世紀の夢の國へ連れ込んで了ふ。次いでカメラはこの地方にあるボーム市を寫し出す。古風な派手な衣裳をまとつた市民の姿が多勢見える。そしてカメラはぐつちに移行して市の首席助役肉屋の主人の着飾つた姿を描き出す。主人はこれから役場へお出掛けの所である。カメラは主人が役場へ歩いてゆく道筋を追つて、實に巧妙にボーム市民の生活狀態やらお祭り氣分やらを知らせてくれると同時に、一方この映畫にあらはれる幾らか重要な人物達

及びその商賣への紹介の勞をまつてくれるのである。かくしてストーリーは徐々に本筋に入つてくるのであるが、この映畫の本當の發端はスペイン軍がボーム市に駐屯した際スペイン人達が暴行を働くだらうとの、市民達の懸念、誤解に基づいて起るのである。こゝに於て初めて、男達は女の嘲笑を買ひつゝ、舞臺の陰へ隠れ、それに代つて女が全面的に浮き出るのである。そしてスペイン軍がいよいよボーム市に入つてくる。外來の軍隊はボーム市に入るや否や、一の愛すべき群衆となり變る。かゝる軍隊は市民（主として女）との接觸にこそこの映畫の眞の諷刺の繪巻がくりひろげられてくるのである。軍隊は市民はその夜軍隊歡迎のお祭氣分に酔ふ。だが、一見した所寔に亂雑で騒がしいあの群衆も、人々の鑑賞眼によつて美化される時舞臺効果として整然と用ひられた極めて華美な一幅の繪にしか思へない。前に言表した表象圖形を以つてこの繪を一の景色に表し出してゐるこゝ——群衆（軍隊）、それは酒に興じた花見客である。鯉（フエデ）は、花（女）と客との騒がしい狼藉を寂かな湖水に映し出し沈澱させてその中を鋭く泳ぎ廻るのだ。微風によつて奏で出す湖水の小波の音楽は素晴らしい。小波が立つと、湖水面に映し出された花と客とは已に入り亂れるのだ。而もそれでゐて、それは藝術的にましまつた美しい眺めなのだ。私は水中の鯉の正

体を見ねばならぬ。

故にこゝで、手つ取り早くこの映畫の核心に進み入らう。既述の如く、この映畫は喜劇である。だが單なる喜劇が眼目なのではない。その裏にはフエデの鋭い女に對する心理解剖のメスがふるはれた痛烈な諷刺映畫である。云はば女への諷刺がこの映畫の基調をなしてゐるのである。そも《フエデは映畫に於ける女の心理描寫の第一人者である。元來心理描寫には必ず性格的な名優を必要とする。それ故にこそフエデは、彼の最もよく理解してゐる名女優即ちフエデ夫人フランソワーズ・ロゼイを使つて、『外人部隊』『ミモザ館』『女だけの都』の製作の歩みを續けてきたのである。所で、この映畫に於て、ボーム市の女達は過去に於て絶えず男に服従させられ壓迫せられてきた。所がスペイン軍のボーム市駐屯を機會にして、これに對する反逆心が彼女等の優越感を前面に押し出し、引いてはその夫を輕蔑し嘲笑して彼女等自らスペイン人に應對するのである。かくしてフエデは女の性格と心理との交錯する状態を描出して以て女なるもの、正体を諷せんが爲に先づいて女達を巧にこの映畫の表面に活躍させるに至るフエデの手法の巧智さには一驚を喫する。所でこの映畫の主演者たる市長夫人フランソワーズ・ロゼイこそ女達の典型であり代表者であるからして、次にロゼイについての最

も印象的な三つのシーンをあげてみることにする。第一のシーンは、廣場で男達を冷笑して追ひ出し女達を呼び集めて大聲疾呼演説をした後ベチャ／＼と轉り合ひ乍ら散會する女達に向つて『靜肅に！』とよばはつた時皆が急に靜まつて各々の持場につく有様を眺めて彼女が洩らした微笑、即ち女に對してではあるが満たされた支配慾、自己滿足の會心の微笑である。第二のシーンは最後の場面、今度は市民全体に向つて恰も己が功績だと言はぬばかりに税金納付三年間免除の告文を読みあげるとき、及び夫にも花をもたせてやつたときのロゼイの微笑である。第三のシーンは第二の場面に直ぐ引き續いてロゼイが浮べた夢見る様な表情である。それは既に結婚した娘までも持つ程の年をして、未だ自分の色香の移ろはざることに對するロマンティックな喜ばしい夢見る面持である。その對象は恐らくオリヴァレス公（ジャン・ミューラー扮）にあつたに相違ない。そのこゝはストーリーの經過に於ても知られるし、亦カメラが彼女の目のむいた方向に直に、ボームを出立したばかりの軍隊の行進を寫し出してきてゐるこゝによつても知られるのである。この第三のロゼイの表情は、それ迄喜劇の筋にばかり氣を取られて來たにしても、ハハー何かこゝにはあるなと、笑つてすまされぬものを感じる位に、極めて印象的に寫し出されてゐる。

大体以上の如き意味に於て、極めて豊富な内容をもつたこの映畫は、甚だ興味深いものであるが、又俳優群を一瞥すれば、その興味は倍加される。市長及び同夫人になるのは『ミモザ館』の名コンビ、アンドレ・アレムとフランソワズ・ロイゼである。この映畫では徹底せる實際家としての役を演ずるアレムの飄逸な風格、ロゼイの男勝りの夫人は、見事なものである。又、大公に扮するジャン・ミューラーの滋味、魚屋の女房としてのリース・クレヴェルスの浮はつて派手な輕薄さ、新人ミシユリース・シェイレルの可憐さ、それから皆から玩弄されるカリカチュアミとしての首席助役肉屋の主人の戀に已れを忘れた馬鹿さ加減等、夫々賞すべきであるが、特別この映畫に一段々輝かしさを添えたのはインチキな僧侶になるルイジュエの堂に入つた破戒僧振りである。こゝにもフェエデの僧侶に對する諷刺が見られる。ちなみにジュエはフランス劇壇の大立物で、『禁男の家』に出演したフランス切つての名女優ヴァランティーン・テツシェの曾つての夫君である俳優は先づこれ位にして、さてフェエデの演出はさを見るに、何處にも缺點を見出し得ない程の巧緻な構成である。藝術的に殆んど完璧の作と言ひ得る。又この映畫はフラン派の繪を參考にした爲か、畫面は繪の様に美しく、全体として一個の美術品を思はせる。大体このフラマン派の繪

はや、エロティックなものだ。このことであるが、この映畫にあつてもやはりエロティシズムが（極めて上品なものではあるが）仄かに流れてゐる。一体にフェエデの作品にはコキユ趣味があるが、その是否は、人の好惡に關するものであるからして、この映畫の藝術價值如何には何等の影響も及ぼすものではない。

セットのよさは偏にメルソンの功績であるが、ルイ・ベーツの音楽も多大の効果を及ぼしてゐる。脚色者としてスパークの功績は今更書き立てるまでもない。

シーンとしては、市長夫人其他が黒の喪服をきて軍隊を出迎へに行くとき、眞白な鵝鳥の一群が彼女等の先導を承るが如きは傑作である。軍人が女達ミバーで踊り廻るあそこの騒がしさ賑はしさは、音楽がそれにぴつたりミ同伴して、最も楽しく且つ最も雜然ミしてゐる様でゐて最も整然たるものを感じるシーンの一つであると思ふ。それから、大公ミ市長夫人ミの、川べりの家の二階の欄干に於るシン等は重要な深い意味をもつた仲々よいものである。

尙最後に、群集について一言すれば、これは舞臺効果ミして取扱はれてゐるのであるからして、かゝる要求は寔に無理であるかも知れぬが、この群集に於て時代的社會性を描出してゐらひたかつた。こゝに私は、ルネ・クレールの『自由を吾等に』を思ひ浮べてみるのである。

二、我等の仲間

この映畫も『女だけの都』と同じくスパークミの協力になつたオリジナルものである。だが同じスパークミの協力にして而もフェエデミデュヴィヴィエミの相違が何ミ著しく畫面に反映してゐる。前者は常に幾分色彩濃厚な重々しい畫面を描き出すに反し、後者の寔に淡々たる美しさを表はす。それはむしろクレールに似通つたものである。しかしクレールが知的、創造的な淡々たる畫面の流動であるに對して、デュヴィヴィエにあつては、一種の詩的な抒情味の淀みなき新鮮な流れを感じる。

所でこの映畫を概觀するに當つて、先づ協同脚色者ミしてのスパークの特筆すべき特色がこゝにも出てきてゐるのを見逃すわけにはゆかない。それは大きな偶然性をおくミいふこゝ、即ち十萬法ミいふ富籤が當るこゝを以てこの映畫のストーリーが構成せられてゐるミいふこゝである。

さてこゝらでこの映畫の核心に進み入らう。

この映畫はデュヴィヴィエの數多い他の諸作と同じく、水々しいさつぱりミした感觸を與へ、畫面は次から次へミきれいに展開してゆく。

吾々はこの映畫の始まるミ共にロマンティックな世界の中に生き始める。何ミそれは美しい世界であらうか。しか

し映畫が後半に入つてくるに、この美しい世界も何かしら不安な雲に蔽はれてくる。ジャツクのカナダへの逃走が第一伏線をなして、この美しい世界の土臺が次第にぐらついてくるのを感じるのだ。土臺の礎石が一つ又一つミ瓦解するに共に、この美しい世界像は一段々ミこの地上へミずり下つてくる。こゝに我々は大いなる悲哀を感じるに相違ない。私は自分の美しい空想にはち切れさうになつてゐた胸が、必然の強い力を以てぐいぐミ締めつけられる様に感じた。このロマンティックな美しい世界に續く唯一本の望みの綱が、最後のジャン（ジャン・ギャバン扮）の銃聲を以て斷ち切られるのだ、そしてジャンの『餘り考へがよすぎた』ミいふ悲痛な溜息を聞くに、吾々は全くこの現實が異常な威壓を以て吾々を押しつぶし、生きてゆく限り吾々はこの現實の如何にもすべからざることをはつきりミ感ずる。そして、ジャンが友人を射ち殺し、ピストルを投げ捨て、大勢の客ががやがやミ騒ぐ中に、一人悄然ミ椅子に身を投げかけて『餘り考へがよすぎた』ミつぶやいた時の彼の氣持ちは、私にははつきり分る様な氣がする。さてこゝで、私は次の詩を取てこゝに引用したい。

眼もて美を見たる人は

既に死の手に落ちたるなれば

もはやこの世の技に適はざるべし

——ブラーテン

この詩をこの映畫ミ共にしみるに味ふに、そこには自らジャンの全貌が浮き出てくるのではなからうか。即ちジャンは空想に生きてゐた人間であつた。この空想を實現してゆく中に、彼は次第に現實の世界を味ははされてくるのである。そしてこの空想がどうやら實現された刹那、彼は餘りにも現實的な痛ましい現實の深處に突き落されたのである。かくして彼には（假令大勢の客がゐなかつたとしても）逃走等ミいふ外の考へが浮んでくる筈がなかつた。彼はこの時に生きる力を失つたのだ。

吾々はかゝるプロットの中に、ロマンティズムに結びついた人ミ人ミの美しい共同主義、協力主義が、利己主義現實主義に結びついた個人主義へ没落し瓦解して行くのを見るに、こゝが出来る。そしてさうみても、この映畫は實に見事なものである。私はこれを昨年度外國映畫第二位に推さうと思ふ。

三、孔雀夫人

ワイラーの手になつた昨年度アメリカ映畫中での白眉であり、優秀文藝映畫としてフランスの『さん底』ミ併稱されるものである。

こゝでは、米國の企業家サミュエル・ダズワースミその妻フラン・ダズワースミの夫婦生活を主体として、アメリカ人なるものが描かれてゐる。アメリカ人を描いたといふここにこの映畫の全價值が規定せられてゐる。サムは一般的性格としてのよきアメリカ市民全体を代表し、フランはアメリカ女性の典型である。歐洲の風習もか、歐洲人ミかが描かれてゐることは云へ、それらは皆この夫婦を――そしてアメリカ人なるものを――描き出すための道具にすぎない夫婦の各々の性格、氣質、並びに諸事件を通しての心理的過程といつたものがこの映畫にあらはれる殆ど總てなのである。そして、かう云つたものは、實に精密、微細に描出されてゐる。つまりワイラーは人物描寫に徹底したといふことが出来る。このこゝを次に少しく述べて見よう。

夫君サムは事業を愛する勤勉なる實際家である。彼はこの映畫の最初に於て、初て仕事をなれた餘裕ある人ミなつて妻フランを伴ひ憧れの地歐洲に喜び勇んで出發する。『俺のお前ミの戀はこれから新しく始まるんだ』ミ妻に語つてゐる通り、そこにはある意味でのロマンティックな若々しい氣持がある。――英國に對しては、England、Moth en England、Home；ミなるアメリカ人の憧れが彼の口を吐いて出る妻に對してはこの上なき勞りがある。だがかう云つた彼の氣持は、事業に對する熱意が他の方面にふり變へ

られたものにすぎないと思はれる。云はば彼はあくまで實際家である。戀をする場合にも彼は常に現實的根底に立脚してゐるのである。彼は出發前には親友に語つてゐる、『俺はこの度の旅行によつて自分を知り、アメリカを再認識し併せて妻をも知るつもりだ』ミ。これこそ實際的な現實的態度でなくて何であらう。

而してこの言葉にこそこの映畫の本旨が含まれてゐる。一切はこゝに出發する。こゝに偉大な勇氣・實踐性ミが潜んでゐる。かゝるものこそ現代の日本人にも必要なものではなからうか？さてかうした決意に基いて行つた行動（旅行）の流れの中に、彼は自分ミ妻ミ、ひいては祖國の美点ミをはつきりミ捉み得たのだ。抑々性格ミか思想性ミかは言葉ミ行爲の中に隠されてゐる。それをしつかりミ把握するために落着いた態度ミ精密な觀察並に洞察力が必要だ。サムは之等の要素を持つた人間にふさはしい感銘を與へる。それは偏にヒューストンの演技力によるものである。サムは決して歐洲の表面的なものに迷はされなかつたそしてアメリカ人のよさに生きるのである。彼の行動は、妻への愛ミ廿年間の夫婦生活の傳統ミによつて常に制肘を受け、一見ふら／＼ミ動かされてゐた様にも見えるが、その實そこにはいつも一定の目的性があつた。それは前述の彼の言葉にあらはれてゐる通りである。

之に反して妻フランには何の目的もなかつた。彼女はオポテュニストであり、目的なしに行動するのである。いつも彼女を動かしたものは自己の満足や自由を求める衝動的な欲望にすぎない。そしてアメリカ女性の我儘な虚飾が如何なく描破されてゐる。我儘な虚飾に彩られた衝動行為、それには不徹底な享樂氣分が濃厚につきまゝつてゐる而してかうしたものが割合よく出てゐたのは船中に於る或る英人との近づきに於てである。そしてその關係は危い所で決裂する。この關係を夫に釋明し、自分が蒙つた侮辱を醫してもらうために、夫に甘へかゝるシーンが次に展開してくる。このシーンは多くのものを表出し暗示してゐる様に思ふ。所で彼女は何故英人との關係に徹底しなかつたか？そこには彼女の、自由を欲する氣儘さや、或る怖れの氣持を以ての自制心等が働いてゐた様である。それは同時に、目的なき衝動行為の不徹底さでもある。何れにせよ、彼女の行為がそしてまたその相手の行為が享樂に基く限り、常に彼女は夫の存在に引かれてゐた。而も彼女は夫に對する絶對の支配を信じきつてゐたのであり、又一方夫に依頼する氣持もあつたのである。最後の船でのシーン、
 He has gone! He has gone! 彼女が絶叫するあたり、實によくこれを表はしてゐる。

年齢のくひ違つた夫を一生守り通し糟糠の妻として年老

いてゆくのを極端に忌避した彼女が、自分一個の不満の充足を自由に氣儘に求めんじした所に悲劇があり無理があるのであるが、併し彼女には大に同情すべき餘地がある。こゝに私はアメリカ夫人のひいてはアメリカ人全体の、一般福祉への滅私的努力と自己自身の満足といふこの間の喰ひ違ひを見出すのである。このこゝは今の日本にも更にまた全世界にも適合することではなからうか。

大變亂雜になつてしまつたが、大体前述の如きものをワイラーの徹底せる人物描寫から汲み取るこゝが出来ゐる。それは實に巧に鮮かに描出されてゐるが、しかし言葉による説明が少し多すぎる嫌ひはなかつたらうか。せんじつめると、それは結局原作のよきといふものになつてくる。こゝつても、それは原作とこの映畫との關係であつて、他方それを音樂との關係から云へば、音樂が餘り出しやばらずに極めて効果的に働いてゐたことを認めるのである。

場面としては、最後の船でのサムとフランとの別離のシーン等は印象的であり、又ナポリに於て、サムの心の内が何氣なく表れ出た、We've said 言葉やコトワイト夫人がしつかりと捉へ又サムがその氣勢を事業の話しの續きで外して了ふあたりは實に輕妙で且つ暗示的なシーンである。其他、汽車でサムがフランと別れてゆくシーン、夫からの手紙が燃やされるシーン等よく、サムがアメリカの家

へ歸つてから家人に八つ當りする場面に於てはサムのみじやくしやした氣持が實によく出てゐた。

俳優としてはヒューストン・チャタートン・アスター船中での英人（名は分らぬ）の順によい。殊にヒューストンミチャタートンは名演技を示した。ルーカス（アーノルド）ミニベン（クライド）ミには感心出來ない。

概評を終つて、こゝに一言しておきたいことは、外國映畫に較べて日本映畫には知性が乏しいといふことである。成程こゝに掲げた様な立派な邦畫には社會的、人生

的の味ひがにじみ出てゐる点、充分第一流の作品として推し得るものであるが、しかしまだ（）それは知性味に乏しいと言ひ得る、どちらかといへば情緒的に表現されてゐる。感性に（豊かといつてデューヴィヴィエ程の感性があるとも思へない。）だといふことは勿論賀すべきことではあるが、私としてはもう少し知性を表し出してもらひたいのだ。所で知性といふことで思ひ起すのであるが、昨年は一本もクレールの作品がこなかつたといふことは寔に淋しいことである。

終り

やつで

理三甲二 足立 正 治

手洗鉢の傍に、かなりよく茂つたやつでが一株あつた。五月雨の頃、夜中に起きて、便所の灯を點けるに、小窓からもうす明りが、暗の中に濡れて冷く光つてゐるやつでの葉をてらし出した。ひっそり静まつた裏街の夜更、雨に打たれて青光りしてゐるやつでの葉に、脊すじを走るうそ寒さを感じて、急いで寢床に歸る事もあつた。――

末娘の千恵は十三にもなつたくせに、臆病な子で、妙にやつでを怖がつた。
『どうして怖いのか。』と聞くに、